

7 ^{ふたがみやま}二上山丘陵に見る歴史的風致

(1) はじめに

^{ふたがみやま}二上山は、その名のとおり、東峰と西峰の二峰を有する山であった。標高は274mあり、西峰は守山城が築城されるときに削られたため、平らになっている。高い山ではないが、^{いみず}射水平野を見下ろして端然と構える秀麗な姿は、何人の目をも惹きつけずにおかない。天平18年（746）に越中国に国守として赴任し、「万葉集」の^{へんさん}編纂に重要な役割を果たした歌人である^{おおとものやかもち}大伴家持には、越中在任中の5年間に詠んだ自身の歌が223首ある。この223



二上山

首含め、越中に関わりのある歌337首が「万葉集」に収められており、万葉の故地となっている。これら337首の歌は後世になって「越中万葉」と呼ばれるようになった。歌には高岡の自然の美しさや農作業の風景などが情感豊かに著されており、現在の高岡の風景や^{ふたがみやま}営みにも当時の情景を見出すことができる。また、^{ふたがみやま}二上山は^{おおとものやかもち}神宿る山として信仰を集め、^{ふたがみやま}大伴家持が詠んだ歌（「二上山の賦（巻17-3985）」）からも二上山を神の山と仰いでいたことが伺える。

射水川 い行き廻れる 玉くしげ 二上山は 春花の 咲ける盛りに 秋の葉の
にほへる時に 出で立ちて 振り放け見れば 神からや そこば貴き 山からや
見が欲しからむ すめ神の 裾廻の山の 渋谿の 崎の荒磯に 朝なぎに
寄する白波 夕なぎに 満ち来る潮の いや増しに 絶ゆること無く 古ゆ
今の現に かくしこそ 見る人ごとに かけてしのはめ

（巻17-3985）

反歌二首省略

（2）歴史的風致を形成する建造物等

（開山忌とたけのこ料理に関連）

①武田家住宅

武田家住宅は、間口、奥行ともに約21m、延べ床面積約457㎡に及ぶ大規模なもので、「ひろま」、「ちやのま」の天井に見られる「桼の内」と称される豪壮な梁組みや小壁の三段化粧貫、竹簀子天井など、農家建築様式の典型を見ることができる。

約230年前に建てられた豪農住宅であり、武田家は代々太田村の※肝煎やそれを補佐する組合頭を務めてきた。太田村に形成された農耕文化の核を担ってきており、山地主だけでなく太田村の海岸砂丘の新田開発にも尽くしてきた。武田家住宅は、当初の形式を良く残し、この地方特有の屋根形式を持つ貴重な民家である点を評価され、昭和46年（1971）に重要文化財に指定された。



武田家住宅

※ 肝煎…世話や斡旋をする人や両者の間を取り持つ人。

②国泰寺

国泰寺は、創設以来、名僧や高僧が輩出され、県内はもとより、全国から仏の道を求め、参禅、修行の雲水、有志者が集まってくる。巨木におおわれたゆるやかな坂道を上り詰めると総門があり、「国泰禅寺」と書かれた額があがっている。左手横には勅使門がある。朝廷の使者を迎えるためのもので、後醍醐天皇をはじめとして、朝廷とのつながりの深さを物語っている。境内は約1万㎡の広さを持ち、全域が静かな道場になっている。境内には経蔵・鐘楼・観音堂・三門・法堂・方丈・禅堂・庫里・天皇殿・開山堂等の諸伽藍が立ち並んでいる。実測調査（平成20年（2008））においては、方丈（本堂）は国泰寺の伽藍の中では最古、最大の建物で、貞享3年（1686）に建てられ、後世の改修・増築により変化したところは認められるが、部材の風化具合などから、この建築年代を示す要素の一つであると解されている。



国泰寺 石碑



国泰寺

ふたがみ い みずじんじゃ しゅん き れいたいさい
 (二上射水神社の 春季例大祭に関連)

ふたがみ い みずじんじゃ
 ③二上射水神社

背面に展開する二上山丘陵に包囲されるように立地する二上射水神社は、悠久の古代より鎮座し、二上山を神宿る山とし、現在の拝殿は寛政5年（1793）に再建されたとの伝えが残っている。

明治8年（1875）、高岡古城の本丸跡に遷座した。その後、氏子一同の請願により元の社殿に御分霊を請願し、明治10年（1877）に旧社殿を分社とする許可がされ、今日に至る。



二上射水神社

（『高岡市史上巻』昭和34年（1959）より）



現在の二上射水神社

また、当神社の御神像である木造男神坐像は、ケヤキ材の一木造りで1mを超すものである。造形は、厳しい表情で、荒ぶる神々を押さえつけるという二上神に相応しい。像表面にごつごつとした鑿痕を刻み付けた仏像を、一般に「鈍彫」と呼んでおり、東日本に多く分布している技法である。冠や体軀に纏う着衣は、おおむね平滑に彫刻しつつ、顔面部のみほぼ全面に丸鑿で水平の痕跡を残している。特に注目されるのは、彫眼で表現されている眼であり、上瞼の位置と眼球の範囲が明瞭に表現されている。造形の最も中核にあたる眼球に、意図的に鑿痕を残していることは、



木造男神坐像

重要な意味を持ち、僅かな光が揺らぐと表情を変えることから、そこに生きる神を演出したと考えられる。制作は平安時代と思われ、当地方での注目すべき古像であるとともに、全国に存在する神像の中でも最大級である。昭和43年（1968）に重要文化財に指定されている。

（3）歴史的風致を形成する活動

①開山忌とたけのこ料理

i) 開山忌

毎年6月、開山した慈雲 妙 意禅師を偲ぶ開山忌が行われる。起源は興国6年（1345）にまでさかのぼるものである。太田地内の辰口寺、至道寺、江雲庵のほか、氷見市の仏心寺、実相寺、弘源寺など、国泰寺の末寺の僧尼のほか壇信徒衆を挙げて行われ、各地より参詣者、見物人も多数集まり、盛大に執り行われる。



開山忌

開山忌は国泰寺における最大の行事であり、壇信徒衆により当日の運営が行われる。当日は、虚無僧による尺八の合奏が般若経に和して奏でられる。この曲は中国宋の時代に起源をもっていると言われ、今日まで伝えられている。行事の様子は、昭和39年（1963）6月3日の地元新聞に「虚無僧四十人が仏曲を尺八で吹聴する」との記載があることから、当時と現在とで同じ形式で執り行われていることがわかる。また、毎年、開山忌の実施にあたって、年間を通じて清掃管理や寄付集めが行われている。継続的に地



北日本新聞

（昭和39年（1964）6月3日付）

域と一体となって行事が執り行われているとともに、虚無僧らによる寄付集めなどの活動は西田・太田だけでなく、二上山丘陵・西山丘陵のふもとにとどまらず広範囲にわたって行われている。

ii) たけのこ料理

国泰寺周辺地斜面には竹林が多く、古くから春の食材にたけのこを用いていたが、昭和20年代に入ると春に催される法事などで参詣者にたけのこ料理を振舞っていた。精進料理の流れをくむたけのこ料理は、たけのこ飯と味噌煮の2品が主で、それに和え物、天ぷらなどが加わったたけのこづくしの懐石膳として整えられた。料理は、僧侶である典座（台所係）が用意するが、食数が多いときは近在の人にも手伝ってもらった。その味の良さから、次第に名が広がって、国泰寺に特別に頼んでたけのこ料理を食べにくる人が増えるようになり、国泰寺付近の農家の中から、た

けのこ料理を商業化する家が現れ出した。『太田一歴史と風土一』には、昭和 27 年（1952）のことであると記載されている。なお、現在でも^{こくたいじ}国泰寺周辺には複数のたけのこ料理の店が構えている。

たけのこ料理の味は、新鮮さと味噌の良し悪しで決まる。味噌は、冬期に雲水が仕込み、3年ほど寝かせて味を良くしたものが用いられる。竹林については、以下、『太田一歴史と風土一』に記載がある。現在もこの習わしは続いており、地元住民により竹林の維持管理が行われている。

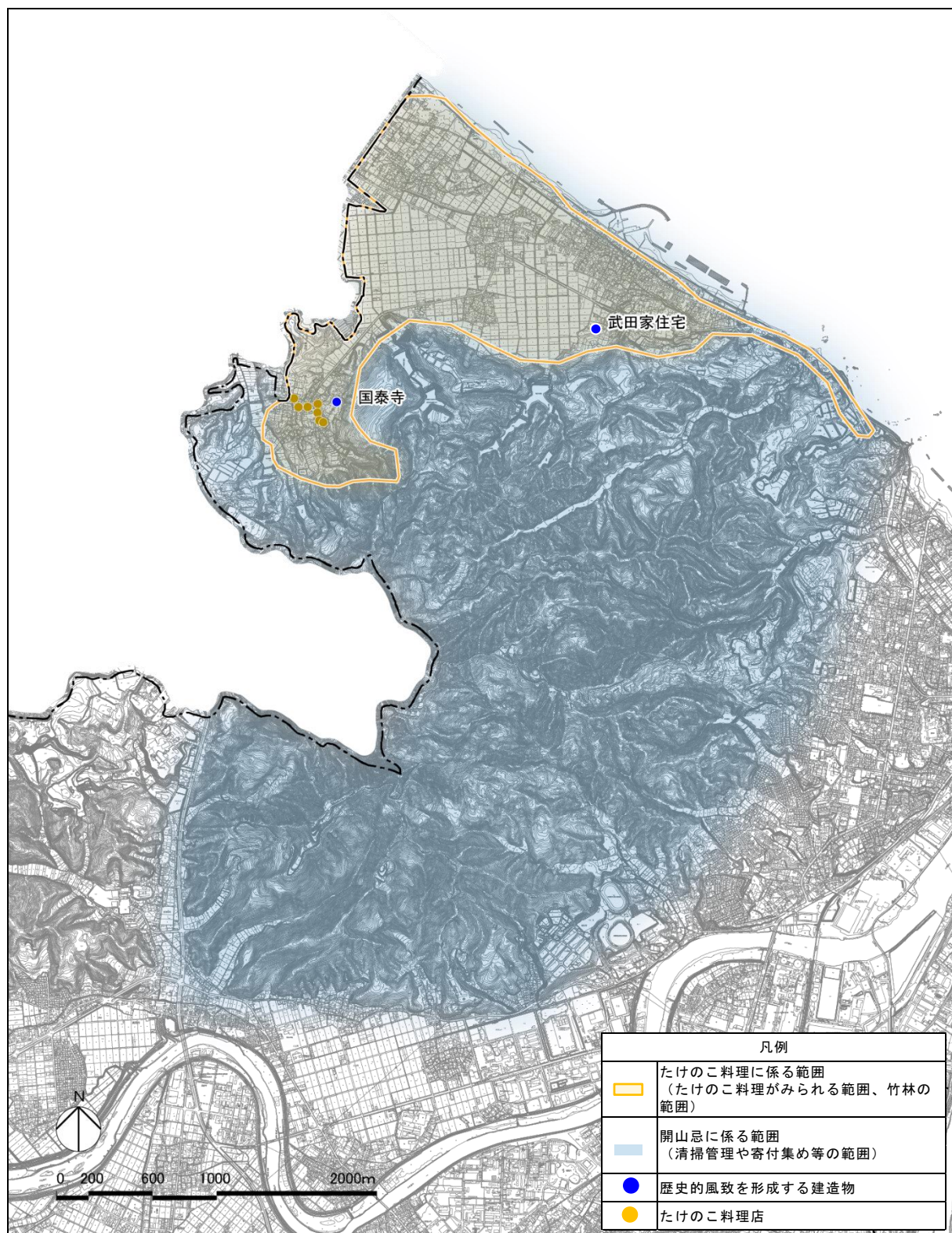
- ・ 竹林に日光を入れ、風通しをよくするため、親竹の間隔を二メートルほどに保つ。
- ・ 冬、積もった雪で親竹が折れるのを防ぐために、剪定をする。
- ・ 肥料をくふうする。
- ・ 6月から8月のころと、春先に竹林の除草を行なう。竹の子は地表に出る前兆として、表土に十文字のひびわれをつくる。それをめあてにして、まだ竹の子が外に出ぬうちに掘るのがこつである。したがって竹林の中は、ひび割れが発見しやすいように、注意深く除草しておかねばならない。
- ・ 料理の味つけのみそは、各店の自家特製のものをを用いる。みそのしこみは主婦の責任である。

（『太田一歴史と風土一（昭和 48 年（1973））』より引用）

^{おおた}太田におけるたけのこ料理はふるさとの味、家庭の味を生命とする。だからこそ、たけのこ料理を提供する店舗として軒を連ねる一角には、農村離れや商業化といった印象を与えつつも、依然として田畑に依存した農村的な性格が強く残っている。現在では、^{たけだけじゅう}武田家住宅を含む^{たか}太田^{おおた}全域の一般家庭にたけのこ料理が浸透しており、海岸沿いの民宿等でも提供される。



竹林の様子



図：開山忌とたけのこ料理に係る範囲

②二上射水神社の春季例大祭

二上射水神社の春季例大祭は毎年4月に行われており、このうち二上射水神社の築山行事は昭和57年（1982）に県の無形民俗文化財に指定されている。二上射水神社の築山行事は、臨時の祭壇に神を迎える祭祀形式で、曳山の原初形態ともいわれる。拝殿の竜は水の神で、農耕文化の形成に伴う農業の守護神として変遷していく起源を示しており、築山行事にみられる祭祀形式とあわせて山岳崇拜的な考え方とは隔し、農業の守護神として変遷していくという説があるなど、深い歴史を有している。



築山行事の飾りの様子

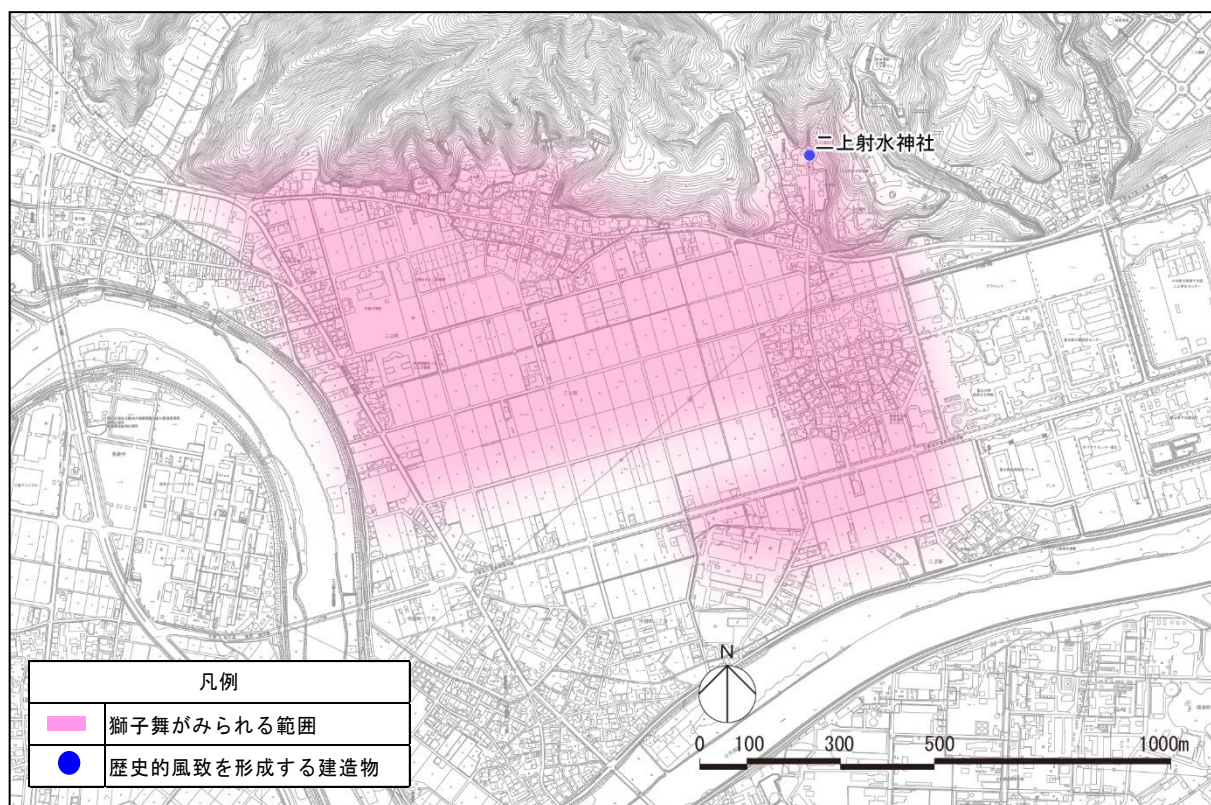
当日は、築山の建造が氏子により行われる。境内に三本杉と呼ばれる大杉の前に、二上山に向かって上下2段の祭壇（築山）が組まれる。上段中央には、祠が置かれ、祠の前には、日吉、二上大神、院内社3神の御霊代である御幣が立てられ、屋根の上には斧をかかげた天狗が立つ。下段には、面を付け甲冑に身を固めた時国、増長、広目、多聞の四天王の藁人形が置かれ、祭壇のまわりには桜の造花と竹籠に入れた木蓮の造花が飾られる。造花は桜と木蓮で、3尺程の竹につけた造花は氏子の家数だけ作られ、式終了後に各家へ配布されてきた。



築山行事神事の様子

この例大祭では、笛と太鼓の音とともに源太夫獅子と現在の祭礼獅子が入場する。源太夫獅子は、拝殿内に入り、拝殿右奥に獅子頭を置く。神道式に獅子の入場前から拝殿内に位置していた神職らによる柏手・拝詞・神輿と参列者の修祓・開扉・宮司の祝詞・玉串奉てんと続く。拝殿前の三基の舟形の神輿の中央に御霊をうつし、楽の音とともに宮司が祝詞を奏上する。それが終わると、舟形の神輿がかつぎあげられ、神幸が行われる。三基の舟形の神輿を築山前に並べると、源太夫獅子による露払い・神職の拝礼・修祓などを行い、宮司の祝詞を奏上する。その後、築山をあとにし、順に拝礼して通り抜ける。なお、築山は、片付けが遅れると神様が暴れると伝えられているため、神事が終わるとすぐに解体する。

なお、同じ頃に、現在の祭礼獅子が行われる。獅子舞は百足獅子で、天狗役、笛・鉦・太鼓を持つ囃子方がいる。一行は、拝殿前に出ると、境内の各所で舞の手を行い、それが終わると、各家々を巡り、玄関先で舞を行う。囃子方の太鼓や笛、鉦の音色が響く中、獅子は玄関先で舞い、その後、花（祝儀）を打ち、口上を述べる。



図：二上射水神社の春季例大祭に係る範囲

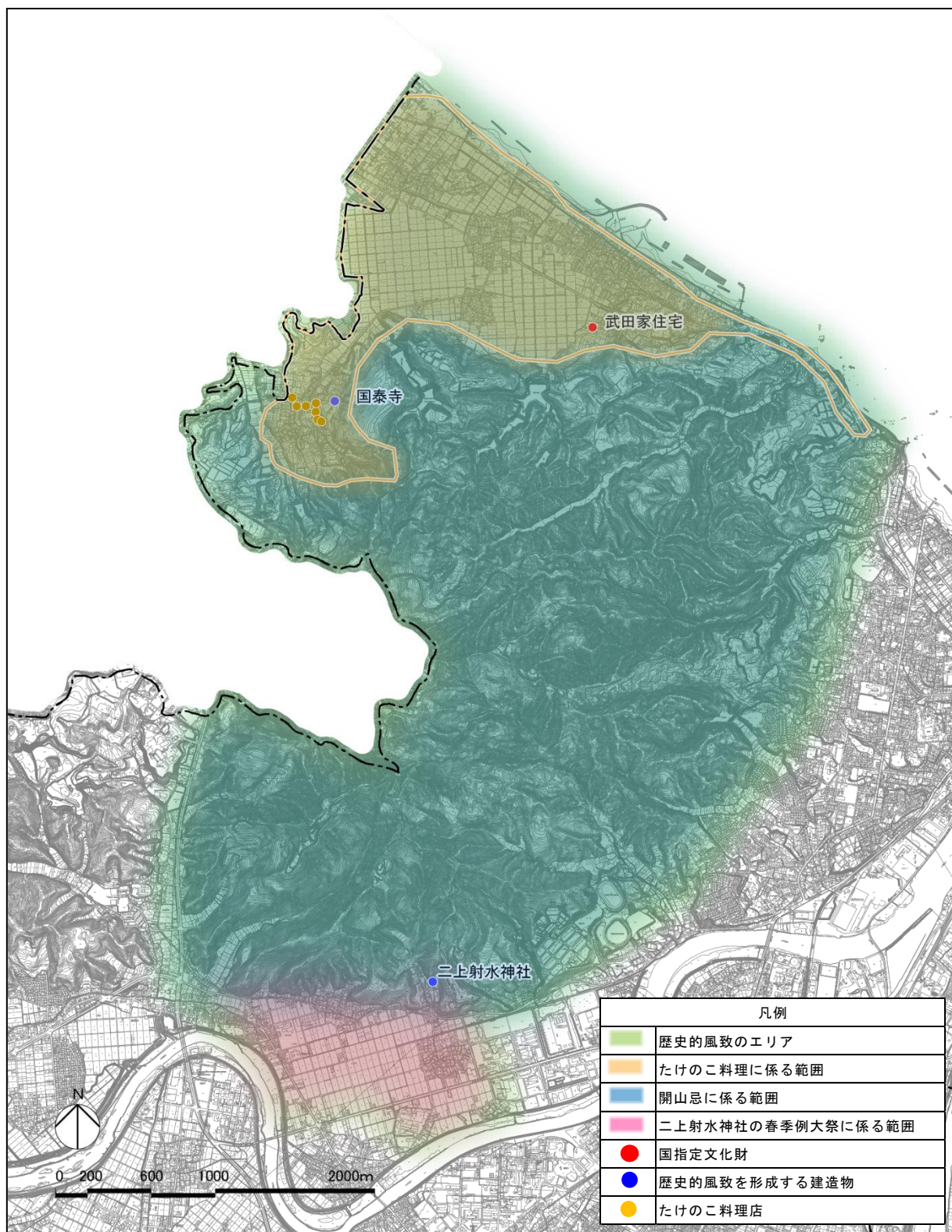
（4）まとめ

二上山は古くから神宿る山として信仰の対象であった。それを表すかのように、先人たちが残した歌には自然の美しさや農作業の風景などが情感豊かに著されており、現在の高岡の風景や営みにも当時の情景を見出すことができる。また、大伴家持が詠んだ歌（「二上山の賦（巻17-3985）」）からも、二上山を神の山と仰いでいたことが伺える。この二上山のふもとに住む人々も例外ではなく、この二上山を中心として、国泰寺や二上射水神社などにおいて人々の活動が古くからあり、現在もなお続いている。

国泰寺は、全国から参禅、修行の雲水、有志者が集まってくる禅寺である。国泰寺で参詣者に出されていたたけのこ料理は、その味の良さから次第に名が広がり、付近の農家の中から、たけのこ料理を商業化する家が現れた。今でもたけのこ料理を提供する店があり、家庭にも広く浸透している。国泰寺付近周辺の竹林では、手入れのために作業する人々が見受けられ、春になるとたけのこと味噌の香りが武田家住宅を含む周辺の地区に漂い、季節の訪れを感じさせてくれる。太田におけるたけのこ料理は、古くからこの地の農耕文化が発達したことにより発祥したものであり、武田家住宅の周辺の家々においてもたけのこ料理の文化が根付いている。武田家住宅として今も残る豪農屋敷の民家建築からは、武田家を核に形成された、農耕文化の歴史と地域の営みをうかがい知ることができる。

二上射水神社の春季例大祭で行われる築山行事は、天上から臨時の祭壇に神を迎える古代信仰の本義を良く残しており、その祭壇のまわりに飾られる造花は、氏子の各家へ配布されてきた。地元の青年団らによる獅子舞は、囃子方の太鼓や笛、鉦の音色を響かせながら、古くから信仰されてきた二上山のふもとに広がる田園地域内の家々を巡る。

いずれにも共有されることは、二上山丘陵を舞台に人々の活動が継承されていることであり、それぞれで培われてきた文化が発展して固有の歴史的風致を形成している。



図：二上山丘陵に見る歴史的風致

（コラム）～「越中万葉」～

「万葉集」のなかから、大伴家持が越中在任中の5年間に詠んだ自身の歌 223 首を含めた越中に関わりのある歌 337 首のことをいう。代表的なものを以下に挙げる。

渋谿の 二上山に 鷺そ子産といふ 指羽にも 君がみために 鷺そ子産といふ
(巻 16－3882・越中国歌)

（現代語訳）

渋谿の二上山で、鷺が子を生むという。“さしは”に使ってもらって、あなたのお役に立とうと、鷺が子を生むという。

馬並めて いざ打ち行かな 渋谿の 清き磯廻に 寄する波見に
(巻 17－3954・大伴家持)

（現代語訳）

馬を並べてさあ出かけようじゃないか。渋谿（現在の雨晴海岸）の清らかな磯に打ち寄せているその波を見るために。

玉くしげ 二上山に 鳴く鳥の 声の恋しき 時は来にけり
(巻 17－3987・大伴家持)

（現代語訳）

二上山に鳴くホトトギスの、声の恋しい季節がやってきた。

立山に 降り置ける雪を 常夏に 見れども飽かず 神からならし
(巻 17－4001・大伴家持)

（現代語訳）

立山に降り置いている雪は、夏のいま見ても見飽きることがない。神の山だからにちがいない。